

2015年8月30日 MJCC 主日礼拝メッセージ 柏倉秀吉

聖書： エペソ3：5－11

タイトル：『教会の目的』

「エペソ人への手紙」は、使徒パウロによりエペソの教会をはじめ諸教会へ宛てられた手紙である。パウロは3:1で自らのことを「囚人」と記しているが、その他の聖書箇所（ピリ1：7、コロ4:10、ピレ9）からも、この手紙は彼がローマの牢獄中に記した手紙であることが分かる。それでこの「エペソ人への手紙」は『獄中書簡』とも言われている。

『獄中書簡』はその他に、ピリピ、コロサイ、ピレモンが挙げられる。

パウロが牢獄でこの「エペソ人への手紙」を執筆したのは、紀元61年頃と思われる。

パウロはローマの牢獄に閉じ込められていたが、ある程度の自由が許されていた（使徒の働き）。そのため手紙を記すことが出来のだろう。だが、やはり囚人である。何かの時にすぐに飛び出して行くということは難しかったであろう。

しかし諸教会には、日々迫りくる様々な危機的状況がたくさんあった。中でも迫害や異端が多く起っていた。

エペソについては、使徒19:1,8-19,23-28に詳しく記されている。*（1ドラクマ（ギ）・1デナリ（ロマ）=1日分の賃金//銀貨5万枚=約137年分の賃金である。）

エペソは、当時小アジアの中心部で経済的にも繁栄し、有名なアルテミス神殿からも、宗教の中心地であったことが分かる。

エペソがこのような街であることをパウロは知っていたので、なおさら

このエペソに住むキリスト者たちに、何とか信仰に留まるようにと獄中からこの手紙を記したのではないだろうか。

さて、こうした当時のエペソの背景を理解した上で、本日の箇所に目を向けていきたい。

5「この奥義は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」

5節の「この奥義は」とは、続く6節で「その奥義とは、」と、「奥義」についての説明がなされている。それでまず6節を見たい。

6「その奥義とは、福音により、キリスト・イエスにあって、異邦人もまた共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。」

前半部分をもう少し分かりやすく言えば以下の様になる。

「その奥義とは、福音、すなわちキリスト・イエスにあって、なされたことである。」

そして「福音、キリスト・イエスにあって」なされたこととは、十字架による罪の贖いと救いのことである。それが「奥義」なのである。一言で言えば「奥義とは福音である。」と言える。

ではもう一度5節に戻り、「この奥義」というところを、この「福音」と読み替えて読んでみたい。

「この福音（奥義）は、今は、御霊によって、キリストの聖なる使徒たちと預言者たちに啓示されていますが、前の時代には、今と同じようには人々に知らされていませんでした。」となる。

すなわちそれは、「この福音（奥義）は、今は、御霊によって、・・・啓示されています・・・」ということである。

逆を言えば、福音（奥義）とは、御霊によってでなければ、決して理解（啓示される）することはできないのである。私たち一人一人はこの福音を御霊によって理解しているだろうかと問いたい。

次に、再び6節（後半）に目を向けたい。

パウロは、この奥義・福音は、「**共同の相続者となり、ともに一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者となるということです。**」と記している。「**相続者**」とは家族に対しての言葉である。それゆえ奥義である福音により救われた者達は血がつながっていないが「**神の家族**」となれるのである。またそれは同時に「**一つのからだに連な**」るということである。救われて神の家族となった者が別々の考えや別々の行動ではなく、奥義であるキリストに連なり一致するということである。云わば一心同体、運命共同体である。救われた者が『あの人は嫌い、この人とは合わない。』また『自分は知らない。やらない。誰かに任せておけばいい。』というのではなく、「**一つのからだに連なり**」一致して行くのである。午後に持たれる第3回目のMJCC全体会は「神の家族」として「**一つのからだに連な**」るためのものである。

また6「**・ ・ともに約束にあずかる者・ ・**」とある。

それは欠けのある人間による約束ではなく、完全で完璧なお方である神による絶対に無効にされたり破棄されたりすることがない完全・完璧な救いという「約束」である。つまり、この世で私達を悩ませる一切の思い煩いと、この世で一番恐ろしい「死」というものに支配さず、完全に解放されて、キリストにある信仰の自由、義の奴隷として勝利の道を歩むことが出来るそういう福音の奥義である救いの「約束」が与えている！ということである。私達はなんとという恵みの中に招かれているのだろうか！十字架の上で罪を贖われた主イエスを心から讃美したい！

7-11v

パウロが7「**私は・ ・**」と言い出しているが、10vでは「**教会を通して・ ・**」と、「**教会**」について記している。これは単にエペソの教会に対してだけではなく、全ての教会に対して語られていることである。パウロは7節で「**私は、・ ・ ・福音に仕える者とされました。**」と記し、続く8節では「**すべての聖徒たちのうちで一番小さな私に、・ ・ ・**」と記している。パウロは自分のことを「**一番小さな私**」と記しているが、特に一番背が低かったわけではない。パウロは自分のことを神の教会を迫害した者（Iコリ 15:9）、また罪人のかしら（Iテモ 1:15）と、自らの罪の大きさを認識していたのである。クリスチャンは罪から救われ、解放されているが、自分の罪を忘れて良い。というものではない！

反対に信仰が深まれば深まるほど自分の罪の大きさに愕然として、主を仰ぎ見ずにはいられなくなる！というものではないだろうか。

パウロにはこうした意識があったので、高ぶらずに「**一番小さな私**」と記したのであろう。この「**一番小さな私がキリスト・ ・を異邦人に宣べ伝え、**」9v「**・ ・ ・奥義（福音）・ ・が何であるかを、明らかにするためです。**」と記している。

そして続く10節で、「**これは、今・ ・教会を通して・ ・示されるため・ ・**」と、『教会の目的』をパウロは明確に記している。

奥義・福音は、教会を通して示されていくのである！！

教会とはそのためにこそあるものである。それゆえ教会にこの世の考え、価値観、判断基準を持ち込んではいならない。MJCCはどうだろうか。また自分自身はどうだろうか。全ての交わりを通し、全ての行いを通し、全ての礼拝・奉仕を通してMJCCは福音を明らかにしている教会になっているでしょうか。そのことを一人一人がよく吟味していきたい。

最後の 11 節では、これらのことを神が切望、懇願していることが分かる。

11「私たちの主キリスト・イエスにおいて成し遂げられた神の永遠のご計画によることです。」

すなわち神は、御子イエスによって十字架の贖いというとてつもない愛の犠牲を支払ってくださったのであるが、それは決してたまたまではなく！「成し遂げられた神の永遠のご計画によること」なのである！！

言うなれば、私達がこのキリストにあって共同の相続者となり、一つのからだに連なり、ともに約束にあずかる者として、しっかりとした信仰の歩みを成すようになされた犠牲であり、そういう生き方をしている信仰者の集まりが教会なのである。そういう教会が奥義・福音を明らかにするのである。

最後にⅡコリ 13：11 を挙げたい。

「終わりに、兄弟たち。喜びなさい。完全な者になりなさい。慰めを受けなさい。一つ心になりなさい。平和を保ちなさい。そうすれば、愛と平和の神はあなたがたとともにいてくださいます。」